

特集1

毛後の中国と世界

《1》

不可避的な権力構造の再編

中嶋 嶺雄

1 不透明な諸状況

中国はいまや「毛沢東以後」の時代へ向けての歴史的移行期を歩みつつある。

去る6月15日には國務院外交部が中国共産党中央委員会の決定だとして、毛主席は今後外国賓客と会見しない旨を伝達し、また、この7月6日には、本年1月に逝った周恩来総理に次いで、中国革命を担った最長老・朱徳がつい先日まで元氣な姿を見せていたにもかかわらず、ついに九〇歳の天寿を完うした。こうした諸事実のなかで、すでにその老齡化がさまざまなかたちで憶測されている毛沢東主席の余

生は、いよいよ「成熟時間」の域に達したといえよう。もとより、その天命を予測することなどできるはずもないが、こうしていよいよ時間が切迫しつつあることについては、いうまでもなく、中国共産党のリーダーたちがそのことをこれまで以上に切実に認識しはじめている。相次ぐ路線闘争の過程で、去る4月上旬には、「走資派」鄧小平を葬った党中央は、いま鄧小平批判のキャンペーンを強化しつつ暫定的に党の團結を回復しているかに思われ、去る5月16日には、文化大革命の「五・一六《通知》」一〇

周年を記念して、およそ五年ぶりに「人民日報」、「紅旗」、「解放軍報」編集部が三紙誌共同社説「文化大革命は永遠に光を放つ——中共中央の66年5月16日《通知》一〇周年を記念して——」を發表した。久しぶりの三紙誌共同社説は、それだけに注目されたのだが、内容的には鄧小平批判に終始して、劉少奇、林彪、鄧小平がいまや文革一〇年の三大逆賊であり、三者は「反革命の修正主義路線」という点においてまったく共通しているかのように描きだしている論法が印象的であった。同時に、「百年後にまだ革命をやる必要があるかないか？ 千年後に革命をやる必要があるかないか？ やはり革命はやる必要があるのである。……一万年以後に矛盾は見えなくなるのか？ どうして見えなくなるものか、

見えるはずである」などの毛沢東の四つの最新指示を紹介し、毛主席自身が最近いよいよ永遠の時間の中に自己の「継続革命」の想念を解き放ちつつある状況を描きだしている。他方で同社説は、「プロレタリア階級は革命的楽観主義者である。われわれは弁証法を信じている。われわれは、『新陳代謝は宇宙の普遍的な逆らうことのできない法則である』(『矛盾論』)ことを固く信じている」と述べ、毛沢東『矛盾論』のなかの新陳代謝の一節を引用するが、ここで、当面の問題の所在を示唆したのであった。

ところで、毛沢東は近年、外国要人と接見以外にその姿を公衆の面前に示すことをしない習慣になっているのであるが、だとすれば、先の中央委決定によって、毛沢東は今後中国民衆のまえに再びその姿を示すことはないのではなからうか。だとすれば、中国民衆のあいだでいまも叫ばれているスローガン「万寿無疆」ももはやこれまでのようなリアリティーをもち得なくなっているのかもしれない。

以上のような諸状況からすれば、すでに中国では「毛沢東以後」の時代が現実にはすでに開幕しているのだといえなくもない。少なくとも中国はいまや「毛沢東以後」への決定的な歴史的移行期にさしかかっているのであり、「昨年の7、8、9月の時期に発生した右からの巻き返しの風潮」なるものも、

最後まで「悔い改めない走資派」として自己を貫徹した鄧小平の態度も、そして4月初旬の驚くべき天安門事件も、いずれも、このような歴史的移行期にふさわしい重大事であったと見做すことができる。

だが、それにしても、この歴史的移行期がどのようなかたちで「毛沢東以後」の中国へと接続するのにかについては、当面の中国の内政状況があまりにも不透明であるので、いまわれわれ外部世界の者が明白な展望をもつことがきわめて困難である。従って、中国のリーダーや民衆もわれわれと同様あるいはそれ以上の不透明な輪郭のなかで、この歴史的移行期を経過しなければならぬのではなからうか。

この点では、やはり、周恩來の死が毛沢東のそれに先立ったという事実がもつ意味は絶大であったといえよう。もしも周恩來の強力なリーダーシップのもとで中国が「毛沢東以後」への歴史的移行期を経過するのだとしたら、「毛沢東以後」を展望することはそれなりに可能であり、状況はより可視的であっただろう。ところが、周恩來死後に中国で生じた一連の事実は、周恩來を欠いた中国内政の安定がいかに至難なものであるかを改めて確認させずにはおかなかった。そのようななかで、4月上旬の清明節を期して起こった天安門事件は、亡き周恩來を敬慕する大衆の根強い感情の発露であったと同時に、中

国社会の基底に潜む毛沢東政治への批判の潮流の根強さを明らかに示した事件であり、毛沢東体制下における大衆の反逆ないしレジスタンスであったことは否めない(天安門事件についてのこのような評価については、拙稿「天安門政変と『走資派』」(本誌76年夏季号)および同「再構成・天安門事件」(『中央公論』76年9月号)参照。こうした大衆の反逆こそ「造反有理(謀反には道理がある)」であることを中国の民衆は近年、鼓吹されてきたがゆえに、今回の事件が中国の将来にたいしてもつ含意はきわめて大きいといわねばならない。しかも、天安門事件に关しては、これを報じた「人民日報」自身の報道ぶりのなかにも、このような含意を刺激するとは思われないトゲが含まれていた。事件を伝えた4月8日付「人民日報」の報道(同紙記者および同紙労農兵通信員の共同報道)は、事件の詳細を突に生き生きと描いて、しかも「……中国は過ぎし中国にあらず、人民も愚かさきかわまれるものにあらず、秦始皇帝の封建社会は再びかえらず、……マルクス・レーニン主義を去勢する秀才どもよ、引きさがれ……」といった「反革命言論」を忠実に紹介したのである。他方で、「人民日報」は、最近のポーランドにおける「大衆反乱」を筆をきわめて高く評価するなど、まさにかつて林彪批判の材料だとはい

中国の諸状況は、中国ですべてに「毛沢東以後」の時代が開幕しているのだといえなくもない。少なくとも中国はいまや「毛沢東以後」への決定的な歴史的移行期にさしかかっていると見えよう。

毛後の中国の権力構造を考えると、やはり党主席選任の問題が最大の課題となるであろう。

集団指導性の可能性はあるが、問題はそれが安定政権となり得るかどうかである。

え、はなはだ刺戟的な言論の含まれていた「（五七工程）紀要」が中国大衆のあいだに流布されたという巨大な謎と比肩すべき状況の不可解さを、最近の中国の諸動向は示しているような気もする。

このような状況のなかで、中国では去る1月の周恩来死去以来、今日にいたるまで、華国鋒の人事、鄧小平解任、毛沢東の外国要人との会見中止など、すべて党中央委員会の決議として公表されてはいるが、しかし、そのような中央委員会（つまり三中全会）が開催されたという発表もその確かな形跡も存在しない。だとすれば、まさに、これほど重要な諸問題が集中したにもかかわらず、中央委員会総会が開

2 権力構造の再編

私はいま、「毛沢東以後」の中国の権力構造に重大な変化が生ずるであろうと述べたが、この問題を考えるには、まず第一に、そもそも中国共産党の権力構造、というよりは毛沢東の絶対的な指導性がその基調である毛沢東権力とはなんであったかを整理しておかねばならない。そして、毛沢東権力は、いうまでもなく、「毛沢東思想」をイデオロギー的な基盤とするものであるが、ここで私なりの定義を試みるならば、毛沢東権力とは、農民主体的な暴動革命の理念に基づく労働兵権力であり、この権力は中国革命の経験を「実践第一主義」的に重視する経験主義に裏打ちされていて、毛沢東個人の恣意に強く左右されるカリスマ的な家父長体制を形成してきた、ということができよう。中国では、75年1月の第四期全国人民代表大会が決定した新しい中華人民共和国憲法の規定によって、国家権力（その最高の

催され得ないというところに、今日の中国の政治状況が集約的に表現されているといわざるを得ない。

それほどまでに今日の中国は、「毛沢東以後」への巨大な不安のなかにあるのであり、こうした巨大な不安のなかにおいては、華国鋒政権の将来の安定度やその政策上の可能性を論ずること自体が無意味であるほどに、「毛沢東以後」の状況は今日の時点できわめて不透明かつ不可測的なものだということができよう。にもかかわらず、一つの重要な推測は可能である。それは毛沢東時代の明示的な終焉によって、中国の権力構造には、不可避的に重大な変化が生ずるであろうという推測である。

権力としての全国人民代表大会、さえ、党の指導下におかれることとなったのであるから（新憲法「前文」および第二条、第一七条、「中華人民共和国のすべての権力は人民に属する」（憲法第三条）との規定にもかかわらず、いわゆる「党の一元化指導」の原則に基づいて、実際には、「中華人民共和国のすべての権力は毛主席に属する」というに等しい状況を法的には形成したのであった。そして、最近の重要な政治的決断は、すべて毛沢東の最新指示や提案に基づいておこなわれているか、もしくは、おこなわれているように発表されているが、いうまでもなく、制度的にここまで強権化された権力構造は、ただひとり毛主席のみにおいて有効なのであって、他のいかなる後継者が党主席に就任しても、いずれも先に定義したような毛沢東権力を形成せしめた諸要素に大きく欠けるがゆえに、もはやこのよう

な絶対権を行使し得ないであろう。従って、「毛沢東以後」においては権力の相対化がまず第一に着手されねばならず、このような相対化は、やはり制度的な保障を得ねばならないのであるから、具体的に、第四期全人代体制および十全大会体制の変更が日程にのぼるはずである。現行体制では、当面は、華国鋒が國務院を統轄してゆくことになるが、彼が國務院総理兼党主席というような、毛沢東も周恩来も任じ得なかったポストを併任することはおそらくあり得ないであろう。従って、やはり新しい党主席が決定されねばならず、この点で華国鋒は周恩ルの後継者であり得ても、毛沢東の後継者ではないから、やはり、党主席選任の問題が最大の課題になるであろうことはいうまでもない。そこで、王洪文、張春橋、姚文元、江青らの文革派首脳が脚光を浴びるのであるが、党主席選任をめぐる問題がかりに平穩に決着したとしても、新任党主席は、従来の十全体制と第四期全人代体制によって制度的な保障を得た現行権力システムの維持を当然の前提とするであろうし、そのことによって毛沢東と比較して決定的に不足しているカリスマ的な権威の減価を補填しようとするであろうから、他の指導者たちは、毛沢東にのみは許容した（あるいは、せざるを得なかった）強権を新任党主席にたいしても制度的に保障することはとうてい不可能であると思われる。従って、「毛沢東以後」には是非とも権力構造の再編をはかろうとするであろうから、この場面での党中枢における角逐は不可避であろう。かくして、「階級闘争」の名のもとでの党内闘争は「毛沢東以後」もなお継続し、まさに「わが党内には、マルクス主義と修正主義の二つの路線のあいだに、ずっと闘争が存在している」（池恒「プロレタリア階級独裁の偉大な

勝利、「紅旗」76年第5号)という状況を当面く
りかえすのではなからうか。

思えば、最高国家権力機関であるはずの全国人民
代表大会を「中国共産党の指導下にある国家権力の
最高機関」(憲法第一六条)とし、こうして名実と
もに中国共産党の一党独裁体制下におかれた中国で
「中国共産党中央委員会主席が全国の武装力を統率
する」(同第一五条)こととなり、軍にたいする党
の支配は機構上も一元化されたのであった。こうし
てすべてに党が優先し、すべてが党中央およびそれ
を統帥する党主席の権限のもとにおかれている現行
権力システムのままでは、「毛沢東以後」、制度的
にはこれほどまでに権力の集中した党主席に誰が就
任するのか、それにふさわしい超越的な指導者は存
在するのか、という問題を深刻に提起するはずであ
る。このような現行権力システムは、まさに今日の
ような「毛沢東以後」への移行期において毛沢東体
制の弱体化を阻止するために暫定的にはうってつけ
のものではあっても、長期永続的なものではあり得
ない。この点においても、「毛沢東以後」の権力シ
ステムの再編は不可避だといえよう。

従って、そのようにして再編される権力構造にお
いては、党主席の権力が相対的に弱められるか、も
しくは、全国人民代表大会の権限が再強化される
こと(この点での74年憲法への回帰)可能性が論理的に
は十分に存在する。このような方向で権力構造の再
編が可能であるならば、それは、ある種の集団指導
体制が中国に出現することを意味するであろう。こ
の場合の集団指導体制には、①「スターリン以後」
ないしは「フルンチョフ以後」のある一時期のよう
な党・政・軍のトロイカ型集団指導体制 ②同じく
党が政および軍を統帥する方向での異質なりーダー

シップの共存、つまり文革派および実務派ないしは
中間派などの勢力均衡的集団指導体制および、③同
質りーダー(たとえば王洪文、姚文元、華国鋒など)
の集団指導体制という三つのパターンが考えられよ
う。もとより、これらのパターンのさまざまなバリ
エーションも考えられるはずである。

ただ問題は、これまで社会主義諸國の権力がその
ような集団指導体制によって安定もしくは持続した
例はほとんど皆無に等しいことであり、この点は、
今日のブレジネフ体制の形成と展開の過程を見ても
瞭然とする。

中国はソ連と異なつて、りーダーシップにおける
いわゆるジェロントクラシー(老人指導型体制)克
服のための「老・壮・青」三結合の鼓吹に見られる

3 路線闘争の行方

最近の中国の公式論調は、社会主義社会におい
て、ブルジョア階級は「ほかでもなく共産党の内部
に在る」との毛沢東最新指示をしばしば繰り返して
いる(たとえば中国共産党創立五五周年を記念した
7月1日付「人民日報」、「紅旗」、「解放軍報」共同
社説「闘争のなかで党を建設しよう」)。そのような
ブルジョア階級の代表こそ、劉少奇、林彪、鄧小平
であったというのであるから、本来の党内闘争をす
べて「階級闘争」だと思做すのであれば、たしかに
ブルジョア階級は「ほかでもなく党内に在る」こと
にならう。しかも、たとえば鄧小平の場合、先の鄧
小平解任決議によつてすべての公職を解任され、政
治的に激しく打倒されたはずであるのに、今日でも
なお、「われわれは、火力を集中して鄧小平を批判

ように、
「毛沢東以後」の指導者構想を独自に形成
しているというのならこのような集団指導体制が大
きな可能性として考えられるのであろうが、この点
では、劉少奇、林彪、そして今回の鄧小平といわゆ
る後継者問題にことごとく失敗し、「接班人」とい
う言葉さえ毛主席の後継者という意味ではタブーで
ある今日の状況からして、「毛沢東以後」の集団
指導体制はやはりきわめて不安定な状況でしか展望
できないであらう。古来、中国の政治に独裁者が出
現しない例がなく、合議制とか集団指導とかの近代
的な統治のシステムそのものを中国の「政治文化」
(Political culture)はそもそも受け容れないよう
にも思われる。「毛沢東以後」へのジレンマはこの
辺にも由来しよう。

し、右からの巻き返しに反撃する闘争を深くほりさ
げてくりひろげなければならぬ」(前掲、7月1
日付三紙誌共同社説)とされているのである。連日
のような「階級闘争」の鼓吹にもかかわらず、人心
は路線変化の潮流を讀みとつていかに大きく動揺し
ていたかを示している。実際、「昨年の7、8、9
月の潮流」は滔々と流れていたように思われ、「走
資派」の立場は世論を背景にしてきわめて幅広い政
治的基盤を有していたように思われる(たとえば紅
宣「鄧小平の反革命世論攻勢について」、「学習と
批判」76年第6号、参照)。このような状況のなか
で、鄧小平が主張した、いわゆる「白猫、黒猫」
論は、「階級闘争を毎日しゃべってなぞいられる
か」とか「きまり文句を言わずに、新しい言葉を



7月9、10両日、行われた故朱德氏の追悼式に参列する市民たち（新華社=A P）

いくつか使うことだ」といった彼の大胆奔放な言葉とともに、今日の中国の人心を大きくとらえたように思われる（これらの鄧小平の言論については、黎章「マルクス主義を全面的に裏切った鄧小平」、「紅旗」76年第5号）。こうして文化大革命から一〇年、相次ぐ政治的・イデオロギー的キャンペーンの果てに、再び「走資派」が党中央内部に発生し、大きな世論の背景をもっていたとするならば、「毛沢東以後」の時代の方性は、ほぼ推測できよう。

この場合、もっとも重要な要因は、「毛沢東以後」の中国が置かれる客観的・歴史的な環境だといえよう。この点では、やはり、周恩来が過般の全国人民代表大会の政治報告のなかであたかも政治的遺言であるかのよう強調した工業体系・国民経済体系の建設を中心としたいいわゆる「四つの現代化」の方向こそ、鄧小平批判、「走資派」批判の激しいキャンペーンにもかかわらず、「毛沢東以後」の中国が模索せねばならない社会的・国家的要請であるといえよう。従って、路線闘争における激しい角逐と曲折を経たのちに

は、結局、このような社会的・国家的要請にこたえるリーダーシップが再形成されるものと長期的には展望することができ、さもなくば、中国は果てしなき混乱のなかでの地盤低下を招きかねない。このような方向性こそ、中国にとっての一つの歴史的蓋然性であり、長期的にも中国が無理なく進み得る道だといわねばならない。かつて、文化大革命の奪権闘争に林彪指導下の人民解放軍が全面的に投入され、軍が奪権闘争できわめて大きな功績を収めたことがあった。その結果、政治のあらゆる領域に軍幹部が大量進出し、中国は一時、「兵營國家」化されたことがあった。このようにして実現された中国の政治権力の軍事化の危機については、当の中国首脳自身がこれをひしひしと感じていたがゆえに、林彪異変によってそのような体質は大きく変じたのであったが、当時も、人民解放軍の特殊な歴史的性格を強調して、極度に兵營体制化された当時の中国の権力構造をむしろ積極的に評価しようとする見方が一部にはあった。しかし、そのような無理は永続しないものである。同様に、「四つの現代化」の立場を全面的に否定し、中国のおかれた客観的現実を無視しようとする政治の方向は、いずれこのような社会的・国家的要請によって拒否されざるを得なくなるのであろう。そして、こうした社会的・国家的要請は、中国の対外関係をより開かれた安定性において求めてゆくことを促進しよう。従って、このような社会的・国家的要請にこたえ得るリーダーシップのもとでは、中ソ関係にも一定限度の変化が起こり得るのである。一方では、中ソ関係が全面的に改善される可能性もまた少ないと思われるだけに（これらの点については、さしあたり拙稿「周恩来以後の中ソ

は、結局、このような社会的・国家的要請にこたえるリーダーシップが再形成されるものと長期的には展望することができ、さもなくば、中国は果てしなき混乱のなかでの地盤低下を招きかねない。このような方向性こそ、中国にとっての一つの歴史的蓋然性であり、長期的にも中国が無理なく進み得る道だといわねばならない。かつて、文化大革命の奪権闘争に林彪指導下の人民解放軍が全面的に投入され、軍が奪権闘争できわめて大きな功績を収めたことがあった。その結果、政治のあらゆる領域に軍幹部が大量進出し、中国は一時、「兵營國家」化されたことがあった。このようにして実現された中国の政治権力の軍事化の危機については、当の中国首脳自身がこれをひしひしと感じていたがゆえに、林彪異変によってそのような体質は大きく変じたのであったが、当時も、人民解放軍の特殊な歴史的性格を強調して、極度に兵營体制化された当時の中国の権力構造をむしろ積極的に評価しようとする見方が一部にはあった。しかし、そのような無理は永続しないものである。同様に、「四つの現代化」の立場を全面的に否定し、中国のおかれた客観的現実を無視しようとする政治の方向は、いずれこのような社会的・国家的要請によって拒否されざるを得なくなるのであろう。そして、こうした社会的・国家的要請は、中国の対外関係をより開かれた安定性において求めてゆくことを促進しよう。従って、このような社会的・国家的要請にこたえ得るリーダーシップのもとでは、中ソ関係にも一定限度の変化が起こり得るのである。一方では、中ソ関係が全面的に改善される可能性もまた少ないと思われるだけに（これらの点については、さしあたり拙稿「周恩来以後の中ソ

関係、「アジア・クォーター」76年夏季号、参照）、中国と西側諸国との関係は依然として重要な意味をもちつづけるであろう。この場合、最近の鄧小平批判の論調は、「西側諸国との経済交流の拡大、外国の技術、設備の導入」などを激しく非難することに力を注いでいるけれども（たとえば、方海「洋奴哲学を批判する」〔「紅旗」76年第4号〕および高路・常戈連「鄧小平の買弁ブルジョア経済思想を評す」〔「紅旗」76年第7号〕、にもかかわらず、この点で今日の中国の貿易構造が、その約85%をすでに西側諸国を相手にするものにならなっているという構造的变化を遂げていることを無視するわけにはゆかない。

この問題は、たんに外国貿易や対外経済関係一般の問題としてのみならず、さらに国防・科学技術の領域においても妥当するであろう。最近のアメリカが中国への軍事技術・軍事情報の提供にきわめて積極的な姿勢を示しているのは、すでに周知のところであり、中国は当面この問題での「買手市場」にあるといえる。一方、最近の中国では、人民解放軍が総参謀長・鄧小平の失脚、軍の最長老、朱徳の死などで消沈し、政治への発言にたいしては林彪異変の教訓もあってきわめて消極的かつ慎重であるようであり、この空隙を埋めるかのようにいたるところに民兵の活躍が目立っていて、その状況には異常なものさえ感じられるほどであるが、この点は都市民兵、工人民兵など、江青女史や王洪文の直接指導下に動員し得るのはこれら民兵組織にかんしてであり、軍は文革派の指令どおりに動かないことを示しているのかもしれない。

だが、いずれ「毛沢東以後」の時代には、民兵の活動にも変化が生じ、人民解放軍の正常な姿が回復

されると思われるので、その場面での人民解放軍にとっては、「国防・科学技術の近代化」こそ最優先課題になるであろうし、この点は内政の推移と軌を一にするであろう。

こうした方向性のなかで中国はやがて、これまでのような権力構造の家父長的、密教的体質を脱却してゆくのではなからうか。中国もやがて、かつてスターリン時代から移行したソ連と同様、イデオロギーや政治的神話よりも、中国の社会・政治構造などがより重要な意味をもつ社会になるのではなからうか。

そうした状況のなかで獲得され、保持される民

4 非毛沢東化への道

このような仮説をまえにしたとき、スターリン体制末期に著しい政治的台頭を示し、やがてスターリン死後に粛清されたベリアと今日の毛沢東体制下の華国鋒とのあいだには、皮肉にも、ある種の共通性が存在することに気がつく。もとより、華国鋒が「毛沢東以後」の時代に粛清の対象になるかどうかは予測しがたいことであるが、第一にベリアはスターリンと同郷のグルジア共和国出身者であり、華国鋒は毛沢東と同郷の湖南省出身もしくは少なくとも湖南省を政治的経歴の地盤とする指導者であり、晩年のスターリンにたいするベリア同様、多くの側近をしりぞけて毛沢東の信頼を獲得したのであった。

第二には、ベリアがソ連の秘密警察・内務人民委員会を握っていたことによって一挙に政治的台頭を遂げたのと同様、華国鋒は中国公安警察の総元締めである國務院公安部長であった。第三に、年略的にはと

衆の意識性こそが社会主義社会の「深部の力」であるはずであり、そのような民衆の意識が、やがて毛沢東思想の絶対化を社会発展の極端としてとらえることになるかもしれない。

スターリン神話の時代の農業社会から高度工業社会への大きな転換を遂げつつあったソ連社会の歴史の成熟が、その内部に育った民衆の潜在的意識性とともに、「スターリン批判」とスターリン以後の時代をソ連社会の内在的要請として必要とした世界史の重要教訓は、中国における「毛沢東以後」の場合においても、やはり大きな意味をもつことになるのではなからうか。

もに次の世代を担い得る人材であったが、いずれも世紀の絶対的独裁者の後継者として明示的に指名されたわけではない。これらの共通性はたんなる偶然であるべきであろうが、歴史はしばしば偶然を必然に転化するのである。

それゆえに右の類推はあたかも、現代世界における革命という一本の赤い糸の伸び来た軌跡にも類似する共通性をもっているのかもしれない。想えば、私がかつて別のところで書いたように、「先進資本主義社会ヨーロッパでの革命というマルクス主義の理論的予定表に反して、ヨーロッパの辺境、ロシアという後進資本主義社会で初の成功を得た現代の革命は、約四半世紀のちにアジアの巨大な農業社会、中国の革命となつて一挙に東漸した。中国革命からさらに四半世紀を経た今日、この革命という『一本の赤い糸』は、今度は南へ伸びくたって、東

南アジアの一角にインドシナ革命を勝利させた」(拙稿「アジア社会主義圏の再編進む——流動状況をつくったインドシナ革命——」、「朝日ジャーナル」76年1月16日号)のであった。こうして、現代の革命は、ほぼ四半世紀ごとに大きな旋回を遂げてきたのであるが、かつて中国革命の勝利がスターリンにとって大変奇立した問題をつきつけたのと同様、今日、インドシナ革命の勝利は中国にたいして数多の奇立した問題を提起している。そして、今日のハノイと北京の冷たい関係からすれば、かつて中国革命勝利直後の毛沢東がスターリンの内政干渉まがいの傲慢な態度に強く怒ったことが今日では明白になっているのと同様、今日のベトナムの指導者をしてかつての毛沢東に類似した心境に陥らせたようななんらかの経緯がハノイと北京とのあいだにあったのかもしれない。

いずれにせよ、現代革命の世界ないしは社会主義の世界には、たんに偶然とのみいきれないある種の歴史的同義性が約四半世紀というサイクルで存在しているように思われてならない。そして、今日の中国とソ連とのあいだには、もとより様々な相違があり、根本的な異質性が存在しているにもかかわらず、それを社会主義という尺度で見ると、中国は結局、約四半世紀の時差をおいてソ連のたどった道をほぼたどるのではなからうか。毛沢東自身、そのような危惧を感じるがゆえに文化大革命を發動し、「社会主義社会での階級闘争」を強調してきたのであるが、にもかかわらず歴史は繰り返さないという保証もまた存在しないのである。もとより、毛沢東政治がスターリン政治と比べて異なっている大きな特徴の一つとしては、党内闘争の大衆運動化という独特の政治形態を指摘できようが、では今日

の中国で毛沢東が強調する「階級闘争」のテーゼは、その本質において、かつてスターリンが彼の政敵を次から次へと粛清するために用いた命題——「社会主義建設の進展にもなつて階級闘争が激化する」という周知の命題と本質的に異なっているのであらうか。

右に示唆したような仮説からすれば、スターリンの死から二五年後の78年前後に毛沢東が天寿を完うし、そして本年はまさに「スターリン批判」以後二〇年に当たるので、あと五年前後を経た81年前後に「毛沢東批判」が敢行されて中国は80年代に本格的な工業化への移行を開始し、さまざまな激動と曲折ののち、徐々に「開かれた中国」へ移行してゆくということになるのかもしれない。

ただ、ここでスターリンの場合と決定的に異なるのは、中国では青天の霹靂のような「毛沢東批判」を必要としないのではないかということである。それはいうまでもなく、スターリン時代とちがって毛沢東時代においてはすでにしばしば「毛沢東批判」がおこなわれてきたからであり、このような「毛沢東体制下での非毛沢東化」の政治戦略こそ、周恩来政治の最大の特長であったと私は考えている。それにしても、「毛沢東は孔孟の道を歩む者」「現代の秦始皇帝」といった言葉がたとえ林彪の反革命陰謀のプログラムだとして大衆のあいだに流布された「五七一工程」紀要」のなかに存在し、また、その後の「批林批孔」運動、始皇帝礼賛キャンペーンにもかかわらず、先日天安門事件では、「秦始皇帝の時代は再びかえらず」といった詩が張り出され、それを「人民日報」が報道したことにも示されるように、毛沢東絶対化の体制のもとで、これまでですらに「毛沢東批判」は頻出しているのだといえよ

う。彭德懷、劉少奇、鄧小平らの党内闘争の敗北者がいずれも毛沢東批判者であったことも、いまさらいうまでもない。このような違いは、「毛沢東以後」の時代において、「毛沢東批判」の形態と非毛沢東化のプロセスを「スターリン批判」と非スターリン化のプロセスとは著しく異なったものにするのではなからうか。天安門事件が示したように、毛沢東側近への根強い批判の存在からして、毛沢東家父長体制を担い、助長しつつ政治を「私物化」してきた側近がやがて中国大衆から激しく糾弾されることがあるとしても、毛沢東自身については、この偉大な革命家の功罪が正当かつ冷静に歴史の文脈のなかに相対化される日がやがてくるのではなからうか。

かつて、ある政治学者は、毛沢東権力の特徴を権力が「道德化」されていることだと指摘したことがあった。たしかに、中国革命を担い來った毛沢東権力には、権力と道德の融合という大きな特性があったように思われる。だが、同時に「道德化」された権力には家父長的独裁と恣意を導くという危険が宿命的に随伴するものである。

57-58年の中国内政の重大な旋回点を契機にして、毛沢東権力には不幸にもこのような危険な側面が目立つようになったといえよう。この点で「毛沢東以後」の権力は、いずれにせよ権力が「道德化」されるという状況から大きく乖離したものになるであらうし、そのことは「毛沢東以後」の中国の権力構造を恒常的により可変的なものとし、中国の勤労大衆の日常性により密着した「通俗的な権力」たらしめるであらう。だが、そのような権力こそ、「毛沢東以後」の時代にふさわしいものだとはいえるのではなからうか。

(なかじま みねお 東京外語大助教授)

朝日アジアレビュー 第七巻第三号昭和五十一年九月一日(金)発行
昭和五十年十一月十一日 国鉄首都特別扱券誌第2470号

the asahi asia review 27: 1976 autumn
通巻第二十七号・一九七六年第三号

27 秋季号

第1特集 毛後の中国と世界

第2特集 アジアの後継者



朝日

アジアレビュー

★第1特集

毛後の中国と世界

● 不可避免的な権力構造の再編

中島碩雄

● 中国人民解放軍の進路

若松重吾

● 中国経済近代化の二つの道

本橋渥

● 転換期対外政策と今後の展望

太田勝洪

★第2特集

アジアの後継者

● 独裁下の分断国家へ南北朝鮮

小栗敬太郎

● 女性指導者の周辺

ヘインド・ワイリヒン・スリランカ

林理介

ベトナム社会主義建設の三〇年

ブクオック・トアン

韓国現代小説史へ解放後編①

金宇鍾

座談会 〓 学生たちの見た中国

愛知大十学習院大十

聖心女子大学生